

氏名	よこ やま きょう こ 横 山 恭 子
学位(専攻分野)	博 士 (農 学)
学位記番号	農 博 第 1481 号
学位授与の日付	平成 17 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	農学研究科森林科学専攻
学位論文題目	都市近郊における地域住民の里山保全意識と地域計画参加意思および里山保全活動に関する研究
論文調査委員	(主 査) 教授 竹内典之 教授 高橋 強 教授 森本幸裕

論 文 内 容 の 要 旨

本論では、都市近郊において隣接するものの宅地開発規模の相違する里山の地域住民を対象に、里山保全意識と地域計画参加意思および里山保全活動の関係を明らかにした。

まず、第 2 章においては、地域住民による里山保全活動の充実をはかると同時に地域住民と行政とのパートナーシップをはかっていくための基礎的知見として、両調査区の地域住民の里山保全意識構造について明らかにした。2 調査区の地域住民の里山保全意識構造は、共分散構造分析により、「里山の機能に対する重要度の認識」と「景観イメージ」および「現状評価」などの同一因子で構成された共分散構造モデルで表現することができた。また、「里山保全意識」は、「景観イメージ」、「里山の機能に対する重要度の認識」における「豊かな自然」、「美しい景観」および「文化歴史的遺産」、「現状評価」の「景観」・「自然」および「文化・歴史的遺産」との関連が強いことが示された。また、同時分析によって、開発規模の大きい調査区(男山)の方が、開発規模の小さい調査区(天王山)より里山保全意識の因子平均が有意に低いことが確認された。

つぎに、第 3 章においては、属性を基軸としてクラスター分析を行い、地域住民の里山保全意識と里山保全活動の関係を明らかにした。クラスター分析の結果、地域住民を 4 つのクラスターに分類することができた。それぞれのクラスターは、居住歴は比較的浅いが、年齢・学歴が高いクラスター 1、年齢が高いが、年収・学歴が相対的に低いクラスター 2、壮年であるクラスター 3、若年で居住歴が浅いクラスター 4 であった。各クラスターともに里山の機能認識は高く、里山の機能認識に関してクラスターによる差異は認められなかった。しかし、クラスターおよび調査区による里山保全活動の差異は認められた。これらの結果から、里山の機能認識と里山保全活動の関係において、層別および調査区間の相違を見出すことができた。すなわち、天王山の高齢層においては、里山の機能を認識していると同時に里山保全活動を実践している割合が高く(一致層)、天王山の壮年・若年層および男山における全ての層は、里山の機能を認識しているものの、里山保全活動を行っている割合が低かった(乖離層)。天王山の高齢層は、開発反対運動のような「社会有効性感覚」が持ちにくいと考えられる活動にも参加する割合が高かった。一方、属性による里山保全活動参加者割合を比較すると、高齢・高学歴・高収入・長居住歴の方が参加者割合は高かった。

第 3 章では、里山の機能認識と里山保全活動の関係において、一致層と乖離層の存在などの課題が明らかとなった。そこで、第 4 章では、社会心理学における広瀬の理論に従って、意識と行動の間に意思という心理的過程を導入した。これによって、地域計画に参加意思を示す地域住民がどのように里山の機能を認識し、また実際にどのような里山保全活動を行っているのか、それらの関係性を明らかにした。また地域計画に参加意思を示す地域住民がどのような属性をもち、どのような情報を入手しているのかもあわせて明らかにした。「里山の機能認識」と「地域計画参加意思」および「里山保全活動」の関係は、全体的傾向として、「里山の機能認識」と「地域計画参加意思」の関連より、「地域計画参加意思」と「里山保全活動」の関連が強いことが示された。また、天王山の高齢層においては、「地域計画参加意思」と「里山保全活動」の関連に

において、「清掃活動」より「開発反対運動」の方が、関連が強かった。また、壮年・若年層においては、「清掃活動」の方が「開発反対運動」より、関連が強かった。また、男山においては、「地域計画参加意思」と「開発反対運動」との関連は、ほとんど示されなかった。一方、地域計画に参加意思を示した地域住民の属性については、高齢・男性の割合が高かった。また、地域住民は、行政広報を中心とした媒体により情報を得ていた。

論文審査の結果の要旨

今後、都市近郊の里山を保全していくには、地域住民による地域計画への参画および里山保全活動が大変重要となる。近年の経済情勢、地方分権をめざす政治指針やNPOの活動域の拡大などの社会的背景から、地域住民の地域計画の参画様式としては、現在、行政主導的形態よりは、むしろ新しい様式である行政と地域住民のパートナーシップの構築をめざす動きが展開されていくものと考えられる。しかし、現状では、まだパートナーシップの重要性が地域住民に広く認識されている状況にあるとはいえない。したがって、このような状況においては、行政が地域住民の地域計画への理解を求めつつ、地域住民の地域計画への参画および地域住民の里山保全活動への導入を進める必要がある。導入に際しては、先駆的事例から地域住民の里山保全に関する実態を把握するにとどまらず、定量的・構造的に地域住民の意識や行動を把握し、計画的にパートナーシップを構築するための情報が必要とされる。

本論文は、定量的・構造的に地域住民の意識や意識と行動の関係を解明することを試みたものであり、その評価すべき主要な点は以下のとおりである。

1. 共分散構造分析により、地域住民の里山保全意識構造を定量的かつ構造的に示した。
2. 地域による地域住民の里山保全意識の差異を同時分析により定量的に比較した。
3. 意識と行動の関係において、属性によって、里山保全意識を里山保全活動に結び付けている一致層と、里山保全意識があるものの里山保全活動に結び付けていない乖離層が存在することを示した。また、属性による意識と行動の関係に地域差があることを示した。
4. 里山の機能認識と地域計画参加意思の間の関連は弱いですが、地域計画参加意思と里山保全活動の関連は強いことを示した。

以上のように本論文は、地域住民の里山保全意識構造を定量的かつ包括的に示すとともに、地域住民の里山の機能認識と地域計画参加意思および里山保全活動の関係を明らかにすることによって、行政と地域住民のパートナーシップに関する重要な知見を得たものであり、都市計画学、農村計画学、造園学の分野に寄与するところが大きい。

よって、本論文は博士（農学）の学位論文として価値あるものと認める。

なお、平成17年2月14日、論文並びにそれに関連する分野にわたり試問した結果、博士（農学）の学位を授与される学力が十分にあるものと認めた。